

今

活躍中の同窓生

株式会社 Sound-F 代表取締役
くれない工業会代表幹事

土屋(水巻) 清美氏
(S57 応物)

筑波大学システム情報系 教授
ダイバーシティ推進室長

吉瀬 章子氏
(S60 経 S62 修経 H2 博経)

「一人で悩む女性たちに、『大丈夫よ』と伝えたい」

いまや女性が働くのは当たり前、就労率6割を超える時代となった。しかし、ひとたび年齢別に眺めれば、M字のカーブを描いたグラフ*1が、女性の置かれた現実を感じさせる。

キャリアを目指す女性の前に立ちだかる壁は、制度の不備か、周囲の無理解か、それとも古い慣習にとらわれた自分自身なのか？

出産、子育てを乗り越えて、何かをあきらめることなくキャリアを積んできたお二人に、働く女性たちへの熱いメッセージを語っていた。

インタビュー・写真撮影 2012.5.25 Sound-Fにて

●プロフィール

よしせあきこ:1962年生まれ。90年、筑波大学社会学系学術研究員。91年、同講師。93年、同助教授。2007年、筑波大学大学院システム情報工学研究科教授。2009年、筑波大学男女共同参画推進室長。2012年より現職。

男性も働きやすいのが 男女共同参画社会

—— 東工大でも女子学生がずいぶん増えて来ましたが、まだまだ理工系の女性は多くありません。少数派の女性が自己実現を図るとき、壁が立ちだかることも多いと思います。まず吉瀬さんから、筑波大での男女共同参画の取組みについてお話しいただけますか。

吉瀬 筑波大学の男女共同参画推進室は今年から対象を広げてダイバーシティ*2 推進室という名前になりました。男女共同参画が目指す社会というのは、女性だけでなく男性も働きやすい社会だと思っています。女性が働くことはかなり一般的になってきましたが、まだ障害がありまして、その部分をクリアしたいと思っています。

特に気になっているのは、大学の若手の研究者です。最近はポストドクター*3 という不安定な身分の

研究職を経て常勤職に就く方が多いのですが、特にしわ寄せを受けるのが女性で、出産などで非常に悩まれています。私たちは、主にポスドク以上の職員を対象に、研究を継続して次のキャリアにつながるようにサポートをしています。

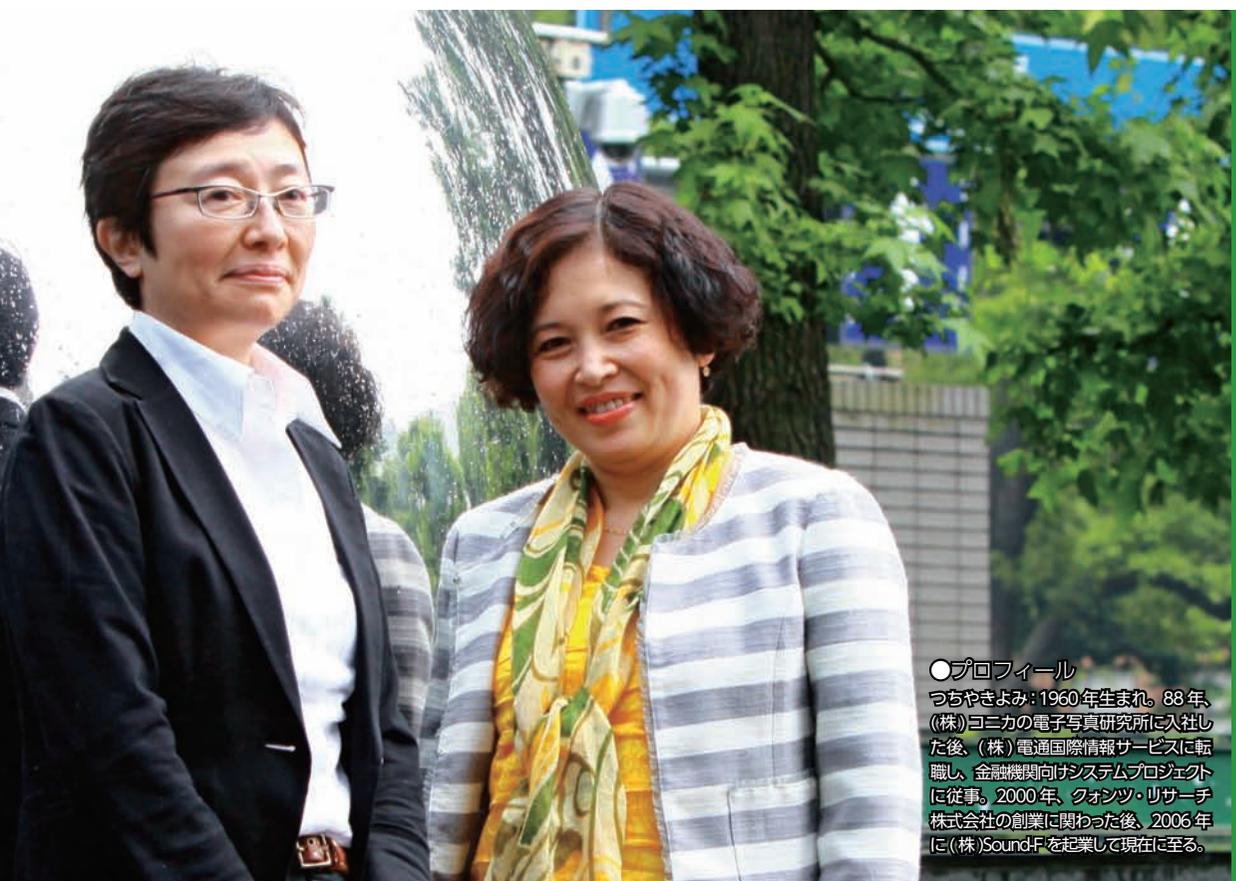
—— では土屋さんから、くれない工業会についてお話しいただけますか。

土屋 くれない工業会は蔵前工業会の一組織で、東工大の女子卒業生と女子在学生との会です。情報交換や交流をすることで、仕事や生活にプラスとなる人脈にもつなげたいと思っています。2年ごとに大きな交流会を開いたり、ホームカミングデイにも参加し、これからますます盛り上げていく予定です。

「なんだ、このクラス女がいるのか」

—— 大学時代はいかがでしたか。

土屋 私の年は、女子は1学年14人、2%に届き



●プロフィール

つちやきよみ:1960年生まれ。88年、(株)コニカの電子写真研究所に入社した後、(株)電通国際情報サービスに転職し、金融機関向けシステムプロジェクトに従事。2000年、クオンツ・リサーチ株式会社の創業に関わった後、2006年に(株)Sound-Fiを起業して現在に至る。

ませんでした。一番衝撃だったのは、入学試験の休憩時間に、女子トイレの場所を尋ねると、試験官が集まって相談を始めたことです。15分しか休憩がないので「何だ、この学校は」と焦りました(笑)。

吉瀬 私のとときには3%ぐらいでした。トイレだけでなく、更衣室もなく、驚いたことに、バレーボールの用具室で着替えるように言われました。中から鍵が掛けられないので、二人組で交互に番をして着替えました。女子用のシャワーもなく、男子が使うシャワー室を1時間だけ女子タイムとしていたのですが、それを知らない男子がいつ入ってくるかと思うと、気が気ではなくて、使う気になれませんでした。

忘れられないのは、最初の機械の授業で「何だ、このクラス。女がいるのか。やる気がしねえな」と言われたことです。

土屋 ひどい(笑)。

吉瀬 ところが、それで「本当だね」と全員笑ったのです。女性が入ると下ネタの話ができないというの

です。アウェイ感で、くらくらっときましたね。何か言い返しても、「女はジョークが分からないから」となりそうで、へらへらと笑うしかない。そんな自分がすごく嫌になりました。

——ムキになっても仕方ないし、ましてや赤面して下を向いても浮いてしまうので、笑うしかなくなってしまったのですよね。土屋さんはそういう苦労はされていないのですか。

土屋 いえ、全然。

吉瀬 何学部だったのですか。

土屋 理学部です。

吉瀬 理学部は工学部に比べて女性アレルギーが少ないように思います。私は修士から情報科学科にお世話になることが多かったのですが、工学部とはだいぶ違いました。

土屋 私の場合、大切にしてもらったと思うのですが、人数が少ないとすぐ覚えられて、授業をさぼったのがすぐに分かるので、大変でした(笑)。

今、活躍中の同窓生

吉瀬 あと、工学部には、お酌が当然という文化がありました。

土屋 あり得ない(笑)。

吉瀬 女性はお酌が上手でないと企業で生き残れないよと教えてくれたのだと思うのですが、私はあまり上手ではなかったのでつらかった。

土屋 私自身は、話のきっかけ作りにお酌をするようにしていますが、強要されたら嫌ですね。

吉瀬 そんなこともあって、1~2年生のときは全く大学に興味を持たず、非常に悪い学生だったのですが、その後、最適化という新しい分野に出会って、どんどん面白くなってハマってしまいました。先生方に変えようとしていただきましたし、いいセミナーが年中あり、常に研究の話ができるという、恵まれた環境で、厳しくも楽しい、まさに理想的な学生時代を過ごさせていただきました。

ところが、勉強を続けたいという希望をもった私にとって、一番の敵は母でした。「博士なんて近所にいるし、恥ずかしい、嫁に行けない」と心配したのです。結局、一番身近なはずの家族を説得するのが一番大変でした。

どんなに苦しくても 人材だけはカットしない

土屋 私が卒業したのは、ちょうど、一流企業が女性採用の必要性を認識し始めたころでした。ご存知のように東工大は大変恵まれていますから、一流企

業の中から一つ選ばせていただいて研究所に入りました。ピュアな研究職で、あまり苦勞せず、逆に、上司から「大丈夫?」「困ったことはない?」と目にかけてもらえました。それはそれで面白かったのですが、研究職は実はあまり自分に向いていないと思っただして、そこから転職をして金融の世界に入りました。仕事内容としては、全く違う分野へ飛び込んだ形になります。ただそこでも、だんだん大きい会社ではできないことが見えてきて、だったらいっそ、と思って会社を辞めて創業間もないベンチャー企業に入ったのです。

さらに、この会社での経験を基に、今度は自分で立ち上げてみよう、と、たった3人でスタートさせたのが今の会社です。狭いワンルームマンションだったので、お風呂にしかサーバーを置けず、ふたを閉めておいたら、スタッフがうっかりシャワーを浴びてサーバーを駄目にしたとか、笑い話のようなことがありましたね。—— 大変な思いもされましたか?

土屋 夜も眠れないほどのことが何度あったことか。金融機関向けの新しいサービスや仕組みを、ITも含めて提案したり、コンサルティングしたりするのが業務ですから、リーマンショックのときなども、新しい仕事が全く来なくなり、どうしようかといきました。

吉瀬 どのように乗り越えられましたか。

土屋 最初に経営者として考えるのは、コストカットですね。なんとか食いつなげるぎりぎりのところで自転車操業でもよいからどのように事業を継続していくか・・・

吉瀬 人材はどうされたのですか。

土屋 うちみたいな会社は人材が命ですから。人材以外の部分が当然対象になります。

—— では、今はそれを乗り越えて落ち着いたところですね。

土屋 日本の金融業界は特に横並び意識が強いのです。規制に守られているので違ったことをやりたがらないのですが、欧米に遅れること5年、10年で、やっと最近、競争意識が芽生えたようで、どういうサービスを提供するか、金融機関側が考えるようになりました。そうなると、われわれのようなベンチャーが新しいことを提案していく機会がすごく増えるのです。

起業して今年で7年目になり、社員も契約社員を含めて20名ほどになりましたが、本当にやっとこれからという感じになったところです。



論文を病院に持ちこんで出産したが

吉瀬 私は在学中に同じ研究者と結婚して、学位論文の公開審査を2ヶ月後に控えて出産を迎えることになりました。「病院にいる間がぎりぎり最後のチャンスだよ。退院したら書く時間はないから」と脅かされていたので学位論文を病院にも持ちこんだのですが、出産直後に論文を見ようとしたら字がかすんで見えなくて、すごくショックでした。

退院してからも、子どもの世話ばかりで論文は読めないし、インターネットのない時代だったので、情報も入手できず、焦ってばかりいました。

出産してから一月ぐらい、ふらふらでもう駄目かもしれないと感じていた時期に指導教員から研究についての電話がありました。そこで鉛筆を握ったそのときに、急に感覚が戻り、私は生き返りました。研究者に戻れるかもしれないと思えた瞬間でした。

今なら「そのぐらい休んでも大丈夫なのよ」と皆さんに言えるのですが、非常にコンペティティブな分野だったので、そのときは「もう駄目だ」と思ってしまったのです。今思うと、もう少し落ち着いていればよかったのですが。

—— そういう経験を伝えていきたいですね。

吉瀬 この間も、筑波大のポストドクが出産することになって、職がなくなるのではないかと大変心配していました。そういう方々に、人事的にそういうことはあり得ないと言えるようになったのはうれしいことです。悩んでいる方には、ぜひ相談室に来てほしいと思っています。

土屋 私も子どもを産みましたが、その会社では出産後働き続けたという先例がなかったのです。それまでは休む間もなく働いていたので、間が空いてしまうことで、戻る場所があるのだろうかという危機感を感じました。

「たかが何カ月か休んでも実は全然関係ない」というのは、今だから言えますが、当事者としてはとても心配ですし、出産後は子どもの保育でまた悩むのです。残念ながら、当時の私にはそれを相談する相手がなくて、ただ手探りでがむしゃらにやってきました。

吉瀬 自分のときにはあまり気にしていませんでしたが、若い世代が悩んでいるのを見ると、憤り



を感じます。例えば博士の学生が出産するというと「もう辞めなよ。うちの奥さんも出産したら仕事を辞めたよ」それで家庭を円満にしてきたのだからとアドバイスして下さる方がいる。「普段はあんなに理解があるのに、なぜ？」と悲しくなるようなことがまだまだあるのです。

—— 民間企業ではどうでしょうか。

土屋 一部上場系の企業は、基本的には制度が整備されています。実際に育児休暇が取りやすいかどうかという部分はあるでしょうが、それほど露骨なことはないと思います。もちろんベンチャー企業はさらに自由なので、そんなことはあり得ないし、民間の方がその点楽かもしれませんね。

無理は続かないから 楽しみを見つけるようにする

—— ワーク・ライフ・バランス*4はうまく取っていらっしゃいますか。

吉瀬 皆さんにご相談を受ける立場なのに、決まとうまくいっているわけではないので、反省することしきりです。

—— 頑張りすぎてしまうのですか？

吉瀬 そうでもないのです。楽しくなければ続かないので、楽しくないと思えばやらない。あるいは、なるべく楽しみを見つけるようにしています。家事はあまりちゃんとしていなくて、朝起きられなくてお弁当を娘に頼んだりしましたし、夕飯も

今、活躍中の同窓生

凝ったものは作りません。主人は洗濯を全部と、縫い物もやってくれますので、申し訳ないと思っているのですが。

—— ついでに食事は作ってくれないのですか(笑)。

吉瀬 もともと下宿生でしたので、家事は何も困らないのですが、「食事まで作ったら、おれが家事、全部やることになるじゃん」って(笑)。

土屋 私は家事はしないんです。働いているのに、そんなにできるわけないと開き直っています。無理しても絶対つながっていかないので、ここは手を抜くというのを決めています。主人が掃除をしますし、子どもも高三と大学なので、食事はみんなが勝手にコンビニで買ってきています。「清美ちゃんの作ったまずいものなんて食べられない」と言われるので、「それなら牛井行ってらっしゃい」みたいな感じ(笑)。

—— そういう部分でバランスを取っていらっしゃるのですね。

吉瀬 無理をしてイライラする方が損ですよ。

土屋 働いても食事は必ず作ることで、そんな女性は今どきいないでしょう？

—— どうですか？

吉瀬 やらざるを得ない人も結構いるように思いますけれど、いろいろと助けてくれる制度も増えましたよね。

土屋 それに便利になりましたよね。無理をして家で作らなくてもいいですね。



—— つらい思いをしながらご飯を作るより、コンビニでも外食でも活用した方がいいですね。

吉瀬 私は下手なのですが、実は、作るのには割と好きなので、結構作っています。気分転換になりますし、やっているうちに何か研究の思い付きもあって、料理の途中でも、付せんにメモしたりしています。

土屋 全く違うことをやっているときに新しいアイデアを思いつくということがありますね。私はお風呂が多いかな。

吉瀬 ルーチンワークは煮詰まったときの一つの逃げ場になるように思います。

起業成功のポイントは リレーションに尽きる

—— 後輩女性に何か伝えたいことはありますか。

吉瀬 今はキャリアを積んだ女性が周りにたくさんいますので、もし困ったら、そばにいる女性を頼って相談してほしいですね。

土屋 この年になって思うのは、何かを続けていくのはとても大切だということです。それは仕事でも、ほかの形でもいいのです。特に若い方には、ぜひご自分の思いや信念をしっかり持って、継続してほしいと思います。

女性が社会の中で働くとき、確かにいろいろな面で差別を感じないわけではないですが、それにとられ過ぎては前に進めないと思います。逆に女性だからこそ大事にしてもらえることもありますし、女性だからこそリスクが取れるということもあるのです。男性だったら、妻子がいて、まだ学費がかかるときに起業をするなんて大変なことなのに、私は主人から何をやってもいいよと言われていています。ちょっとずるいような気もしますが、そういう意味では女性の特権を生かしていると思います。

女性に限らない話ですが、起業の成功のポイントは、間違いなく人とのつながりです。今までやってきたことで培われたリレーションをどれだけ持っているかが、その先の仕事につながります。これならこの人に聞けばわかる。これはこの人と言えば助けてくれる、こういった人的リレーションをどれだけ持っているかが起業の成功の8~9割だと思います。

理系は自分の研究に閉じこもりがちですが、こ



とビジネスの世界では、専門性だけでは駄目で、自分のパーソナリティなり、リレーションをどれだけ有効に使えるかということが重要です。

そういう意味では、違う分野の人とも広くコミュニケーションを取って、常にアンテナを張って情報を持っていないと駄目なのです。外国も含めて、異業種、異分野とどんどんコミュニケーションを取っておくことが糧になるので、今この瞬間に役に立たないとしても、常にそういう意識を持っていることが重要だと思います。

特殊な環境を生き抜いたオタクの文化

—— 同窓会でいろいろな方に会うのも、そういう意味でいいことですね。

土屋 いろいろな方のお話を聞くのはすごく勉強になりますね。それに、蔵前工業会は蔵前ゼミや経営者懇話塾のような社会人と学生の懇談の機会を設けていますが、あれはいいですね。大先輩や経営者と話せることなんて普通の学生にはできな

いことなので、絶対生かした方がいいですよ。

吉瀬 企業でも研究者でも、東工大というだけでどうも特殊なおいを感じるらしくて(笑)。どこに行っても東工大というだけでまともされるのです。「東工大の特殊な環境を生き抜いたんだね」みたいに、お互いの顔つきがちょっと違うのです。だから、同窓会というのは非常に大きい意味を持っているのではないかなと思うのです。

—— 時代と場を共有しているのは大きいですね。

吉瀬 ちょっと変わって、偏っていますからね。

土屋 すごく偏っていますよね。

吉瀬 「0, 1」では話ができるけれど、日本語は話せないという学生がたくさんいましたよね。

土屋 そうそう。

—— そういうオタク文化みたいなものが、同窓生にとっては居心地がいいこともありますよね(笑)。

吉瀬 ええ、愛すべきオタク文化なのです。最近、薄れつつあると聞いてはいますが(笑)。



インタビューア：平山(村松) 南見子 (S45 修化)

文：秋庭 紀子

写真撮影：谷山 貴

* 1 M字型曲線

女性労働者の年齢階層別の労働力率のグラフが30歳代前半を底にしたM字カーブを描くことからこういう。出産・育児の期間に仕事を辞め、子育て終了後に再就職するという日本女性のライフスタイルの現れ。

* 2 diversity

多様性。企業などで、人種・国籍・性・年齢を問わずに人材を活用すること。

* 3 ポストドクター

大学の博士課程修了の研究者。任期を決めて大学の研究職に就くケースが多いため、身分が不安定。ポストドク。

* 4 work-life balance

仕事と生活の調和。仕事のために私生活を犠牲にするのではなく、やりがいのある仕事と充実した私生活を両立させるという考え方。

くれない工業会 URL http://www.kuramae.ne.jp/topics_list21/